

立志

稚心五表

早いもので、新年になってもう半月が経ちました。そして、この「一月一七日」という数字を見ると、阪神淡路大震災を思い出してしまいます。今年でちょうど三〇年になります。

一年生は一ヶ月前の修学旅行で神戸市にある「人と防災未来センター」を訪れましたので、そこで学んだことをしっかりと覚えておくことでしよう。

その当時、地元の方々が復興業務に当たる上で、現場では大人たちがあらゆるところへ奔走していたのですが、中学生は現場で何をして良いか分からず、十分な活躍をできなかったとのことでした。

「中学生にそこまで求めなくても……」という声が聞こえてきそうですが、昔々、江戸時代では、数えで十五歳になった人は「大人」として扱われていました。そこで行われる「立志式」を「存じの方もいること」でしょう。読んで字のごとく、一人一人が「志を立てる式」です。

立志では、橋本左内の『啓発録』という本の一節が使われます。橋本左内は、幕末を彗星のごとく駆け抜け、安政の大獄で、二十六歳の若さでその生涯を閉じた人です。

日本を本気で変えようという志を持った人で、幕末の荒波の中、自分はどうか生きていくのか……、それを何と十五歳の若さで書き上げた本が『啓発録』です。後に西郷隆盛や坂本龍馬に大きな影響を与えることになったのです。

みなさんと同じ中学年代で、これからどう生きるべきか考えたこの本の中に、左内の「五つの志」が書かれています。

「自分が生きていくためには、

『去稚心』『振気』『立志』『勉学』『択交友』の五つが大切だ、と誓っているのです。

「目標を持ちなさい(志を立てよ!)」と言っるのは簡単ですが、実際はなかなか難しいものです。そのきっかけとなるものとして、最初に書かれた「去稚心」を今回は紹介します。

「去稚心」とは、「稚心を去れ!」ということ。簡単に言う、「幼い心を去れ!」ということ。簡単に言う。

果物等が熟してないものを「稚」といい、熟すと美味しい状態になる前の、どこか水っぽい状態です。

人間で言うところ、ゲームばかり、街をうろついたり、自分が楽しいと思える遊びばかりに熱中して、毎日怠けて楽を追ったり、大人の目を盗んで学習をいい加減にしてさぼったり、自分で起きられず、いつまでも保護者に甘えて何もなかったり……、そういうことは全て「稚心」から起きるものです。

幼いうちは「稚心」があっても可愛がられますが、中学年代にまで成長し、自分で勉強やスポーツを求めていく年になっても、「稚心」が残っていたら、何をしても上達せず、成功や完成に至らない、と十五歳の左内は自分に誓っているのです。「稚心」があるから、人は甘え、楽な方へ進み、大事なことを疎か(おろそか)にしているのです。

「わがまま」は幼児性の最たるもので、「うぬぼれ」や「背伸び」も似たようなものです。

学校生活を見ていると、体は大人同様まで大きくなっているものの、取っている行動は幼い「稚心」の現れを感じます。

まずは、「稚心を去れ!」ということ。簡単です。

大人の「大」という文字は、分けると「一」と「人」になります。どんな「大きな」ことも、まずは「一人」から……。

だから、集団に埋もれて何もしない自分ではなく、たった一人でも思い切り行動したり、我慢してやりきったりすることが大事なのです。(朝の挨拶も、勇気を出してやってみよう!)

一人一人が、自分の「立志」してみましょう。

参考文献

「君よ 志を持って生きてみないか」
石川 洋